

# フランス語教育におけるテキスト言語学 と相互的学習方法の応用

——フランス語の冠詞の用法を日本語話者に習得させる場合——

Cécile MOREL

## はじめに

『りべるたす』に発表した研究ノート「テキスト言語学—教室での使い道はあるのだろうか？」（モレル，2002）を元にしてテキスト言語学を教室で使うとすると，どういう風に使えるのか，またその使い道によってどういう結果が得られるのか，以下に考察して行きたい。テキスト言語学を相互的学習に結びつけながら授業を進めて行くことによって，学習の成果はあがるにちがいない。相互的学習というのは，1970年代に盛んになったコミュニケーション・アプローチから生まれた，外国語教育における授業の運営の方法である。相互的学習方法は，学習者と教師，または学習者同士が力を合わせて相互的に作用しあうことである（モレル，1999：35）。

外国語の習得には，その外国語の形式に対する知識と，言語活動の実践とその習慣化が必要である。外国語の形式についての知識を得るには，学習者の外国語に対する意識や意欲，理解力が必要であり，その上，母語を客観的に見直すことができ，外国語と比較対照する力も必要である。また，外国語を習得するには外国語の規則や文化への適応が必要とされる。母語と母国文化を相対化し，客観的に見直すことができる学習者ほど，外国語への習慣化と適応がうまくできる。

テキスト言語学は，その外国語の形式について，一つ一つの文ではなく，テ

キストの流れを学習者に理解させる有効な知識を提供してくれる。テキスト言語学を授業に応用することによって、学習者が外国語と母語のテキストの流れを理解し、学習者の母語と母国文化に対する意識も相対化されるにちがいない。

一方、相互的学習方法においては、学習者と教師、または学習者同士が力を合わせて相互的に作用しあうことが前提であり、学習者が外国語の言語活動を実践し、習慣化にするためには、相互作用が必要とされる。言語の学習活動を相互作用的なものにするには、少なくとも一人の学習者と一人の教師が必要である。学習者と教師との相互作用、または学習者同士の相互作用によって外国語習得というプロセスは成立する。

また、相互的学習方法においては、学習者が自分自身の言語習得プロセスについて考え、それを理解した上で学習活動をおこなうことが理想と考えられており、それによって、習得プロセスの進行が促進される。

なぜテキスト言語学を相互的学習方法に結びつけることが必要になるかというと、テキスト言語学の内容を、相互的学習方法を通じて勉強して行くうちに、テキスト言語学が明らかにしてきた内容が、学習者により具体的に身につくようになるからである。外国語を習得するプロセスにおいては、テキスト言語学のような言語についての知識と、相互的学習方法のような、よりよい教室活動や言語体験に結びつく技術が、互いに補完しあうことが必要である。その意味で、テキスト言語学の教育への応用という問題について、相互的学習方法の利用可能性という観点から考えて行きたいということである。

## I

まず、この章では、「テキスト」とは何かを説明し、テキスト言語学のはじまりと発展について、簡単に振り返る。テキスト言語学で言う「テキスト」(texte)とは、「談話」(discours)とも呼ばれるが、「文」(phrase)のさらに上に立つ言語的単位を想定して、それに与えられる用語である。「テキスト」という用語がどちらかといえばヨーロッパ系統の論文で一般的であるのに

対し、「談話」はもっぱらアメリカの学者によって好んで用いられる。

「テキスト言語学」という言葉が初めて使われたのは、アダム(Adam, 1999: 8)の中で指摘されているように、ヴァインリッヒの『テンプス』(1964)である。ヴァインリッヒは「テキスト」を“限定の網”にたとえながら、次のような定義をしている。「テキストとは、その各部分が他の部分と相互依存的な関係を持つ全体である。その部分と部分のつながりは、規則的な確実性を持ち、調和したものとして続き、最初に理解されたテキストの部分は後の部分の分かりやすさに役立つ。また後の部分が理解されてから、今度は最初の部分の理解が深まるように役立つ。」『テンプス』(仏訳 Weinrich, 1973:174)

ヴァインリッヒの次にテキスト言語学に影響を与えたのはハリデーとハサンの研究である。彼等が1976年に書いた *Cohesion in English* は、アングロサクソンの諸国においてもっとも注目されている「テキスト言語学」に関する著述であるが、ここで、彼等は「テキストは、あらゆる言語において、言語によるコミュニケーションが実現したものである。たとえば、会話、新聞記事、手紙、文学作品などは言語によるコミュニケーションが実現したものであるのでテキストとして扱うことができる」としている。テキスト言語学という分野は、これらの言語学者達の研究によって生まれたのである。(Halliday & Hasan, 1976:324)

このように、テキストとはその各部分が他の部分と相互依存的な関係を持つ全体であり、その基本的な機能は情報を伝えるということである。そして、具体的なテキストの構成は、話し手と聞き手にすでに共有されている「既知の情報」を踏み台にして、それに何かを「新出の情報」としてつけ加えるという形で展開される。指示された「新出」の情報は、そこで「既知」の情報となり、それにまた「新出」の情報がつけ加えられる。このような、テキストの構造と言うのは、学習者にとって大変理解しにくいものである。フランス語の場合、学習者にとって理解しにくいテキスト言語学上の項目の代表的なものは、冠詞の使い方だと思われる。そこで、本論文では、フランス語の冠詞を学習者に理解させるために有効な、テキスト言語学を応用した説明の仕方を考察する。

## II

フランス語の冠詞について、ヴァインリッヒの『テンプス』では、次のように説明している。「簡単に結論からいうとドイツ語を含めヨーロッパ言語の場合、定冠詞は旧情報に言及するが不定冠詞は新情報に言及する……定冠詞と不定冠詞の対照によって旧情報と新情報との区別が正確にできるようになる。冠詞から情報が生まれたり、発生したりするということではなく、それぞれ旧情報を持つものと新情報を持つものとして存在している。それゆえ話し手はテキストの中での冠詞の使い方によって聞き手に旧情報を伝えたり、新情報を伝えたりすることができ、聞き手はその情報によってテキストの中の言葉が正しく理解できるようになる」。『テンプス』（仏訳 Weinrich, 1973:28)

一般に、旧情報とは、話し手と聞き手が共有していると想定されている情報で、新情報とは聞き手がまだ知らないと話し手が想定している情報である。日本語には冠詞と呼ぶべきものはないが、上記のような冠詞の働きに近い働きをするものはあると思われる。その一つは助詞の「は」と「が」である。

一部のテキストでは助詞の「は」は旧情報にかかわり、「が」は新情報にかかわる。本論文では、このような旧情報の「は」と新情報の「が」の問題について、それらが場合によってフランス語の冠詞とほぼ同じような働きをすることを確認し、まとめることが重要だと思われるが、日本語の「は」と「が」には新情報・旧情報提示以外の用法もあるので、ここでは、これまで指摘されている「は」と「が」の基本的な用法全体について井口厚夫、井口裕子（2004：122）を参考に概観し、フランス語の冠詞との対照関係を確認しておきたい。

〈「は」と「が」の主な用法〉

### ①「疑問文」において

（～は……Q？）帰ったのは誰ですか。

（Qが～？）誰が帰りましたか。

フランス語では疑問詞には冠詞がつかないのでこの例文はフランス語の冠詞

と日本語の「は」と「が」を比較するのに適切ではない。

②「種類を表す主語／個別を表す主語」

(種類) 桜の花はきれいですね。

(個別) 桜の花がきれいですね。

この例文は適切である。種類を表す「は」は旧情報、個別を表す「が」は新情報と考えられるし、フランス語に訳せば定冠詞の旧情報と不定冠詞の新情報にあたる。

③「特定主語／不特定主語」

(特定) 見知らぬ人が近づいてきた。その人は首からカメラを下げている。

(不特定) 大勢の日本人が夏休みに海外へ行く。

不特定主語「が」は新情報であり、特定主語「は」旧情報であると考えられる。フランス語では定冠詞が特定主語になり、不定冠詞が不特定主語になる。

④「従属節の中」

父は〔寝ている時〕出かけた。

〔父が寝ている時〕出かけた。

この例文は旧情報・新情報を説明するには適切ではないと思われる。

⑤「現象文」(何かに気がついたとき)

あれっ、子供が泣いている。

現象文は全体は新情報であるので主語も「が」が用いられている。フランス語では不定冠詞である。以下の⑥, ⑦, 旧情報・新情報を説明するには適切ではないと思われる。

⑥「否定文」(否定では「は」が使われることが多い)

Q: 机の上に財布がありますか。

A: いいえ、財布はありません。

(あっ、私の財布がありません。一現象文)

⑦「対照」

母は日本茶は飲みますが、コーヒーは飲みません。

息子は犬が好きなのですが、娘は嫌いなので困っています。

これらを見ると旧情報か新情報かという問題とは無関係の「は」と「が」の用法もあることが分かる。そこではっきりさせたいのは、冠詞の働きの全てが「は」と「が」の問題に当てはまるとは言えないが、フランス語の冠詞も日本語の「は」/「が」も既知か未知か、つまり旧情報か新情報かが問題になる点で共通点があり、冠詞の働きと「は」と「が」の働きには共通点があるということである。

上記の用法についてさらにまとめると、日本語の「は」/「が」の用法のうち旧情報・新情報に関係しているのは②, ③, ⑤であり、関係していない用法は①, ④, ⑥, ⑦である。②の例文をしてみると「桜の花はきれいですね」という例文の中の「は」によって、一般的な事柄やすでに了解ずみの事柄が提示されている。上記の②, ③のような場合、フランス語では定冠詞によって、一般的な事柄やすでに了解ずみの事柄が提示されている。また、③の例文をみると、了解ずみの事柄が提示されていることも分かる。②, ③の例文はまさに既知の場合である。

それに対して、日本語の「が」は未知の内容を表す。「桜の花がきれいですね。」という例文から、ある桜の花が新情報として提示されていることがわかる。③の例文をみると、不特定の「が」で未知の内容を表されていることもわかる。

⑤の例文は「あれっ、子供が泣いている」の「が」は新情報であり、その現象に気がついた話し手が聞き手に早速伝えようとする文であることもわかる。このような場合フランス語では不定冠詞が使われる。

次に日本語の「は」/「が」の用法が旧情報・新情報に関係していない、①, ④, ⑥, ⑦の例文をみると、いずれも、フランス語では冠詞で表せない内容であるとわかる。

①帰ったのは誰ですか。フランス語に訳すと Qui という疑問詞が使われる。

誰が帰りましたか。 Qui est rentré?

④父は〔寝ている時〕出かけた。 Mon père est sorti quand je dormais.

〔父が寝ている時〕出かけた。 Je suis sorti quand mon père dormait.

フランス語に訳すと Mon という所有形容詞が使われる。

⑥Q：机の上に財布がありますか。 Ya-t-il un portefeuille sur la table?

A：いいえ、財布はありません。 Non, il n'y a pas de portefeuille.

この例文の場合「が」新情報として考えられるが否定文の例文として扱われているので旧情報・新情報という問題と無関係とする。

⑦母は日本茶は飲みますが、コーヒーは飲みません。

Ma mère boit du thé japonais mais elle ne boit pas de café.

息子は犬が好きなのですが、娘は嫌いなので困っています。

C'est ennuyeux, mon fils aime les chiens mais ma fille déteste les chiens.

④と同じで、フランス語に訳すと Mon, Ma という所有形容詞が使われる。

フランス語の冠詞と日本語の「は」/「が」の用法が、どちらも旧情報・新情報に関係していることを学習者に分からせると学習者の理解が深まると同時に学習者に母語と母語の文化をさらに相対化する機会を与えることができる。そこでどういった方法で学習者に旧情報・新情報について理解させることができるかをこれから説明して行きたい。

### III

「テキスト言語学—教室での使い道はあるのだろうか?」(モレル, 2002: 74) からいくつかの例文を取り上げて日本語に訳し、フランス語の冠詞と「は」/「が」についてもう少し探ることにする。まず、次の例文では、  
Hier, une amie (新情報) est venue. Cette amie (旧情報) habite à Paris.  
昨日、友達が来た。その友達はパリに住んでいる。

Une は不定冠詞, cette は指示形容詞, amie は名詞である。この文章は決して次のようにはならない。Cette amie habite à Paris. Hier, une amie

est venue.

日本語に訳したものをみても同じことが言える。「は」と「が」を入れ換えることは不可能だ。

もう一つ例をあげると：Un homme (新情報) a été renversé par une voiture. L'homme (旧情報) a déclaré à la police qu'il n'avait pas eu le temps de voir la voiture.

ある男の人が車にひかれた。その男の人は警察に、車をみる時間はなかったと言った。先の文章と同じようにけっしてこの順番をかえることはできない。先に述べたように、フランス語の文章の中では冠詞の位置によって、日本語では「は」と「が」の位置によって名詞の役割を確認できるのである。たとえば先の文章の続きを書いてみるとそれがよく分かる。

Cet homme (旧情報) a eu la chance de n'avoir été blessé que légèrement.

(その男の人は幸運にも軽い怪我をただけだった。)

次の文章ではフランス人の性格を紹介し、住んでいる地方によって性格が異なることを表している (Le Bray, 1998:47)。

Le français (旧情報または特定) présente des qualités multiples.

(フランス人は色々な長所をそなえている。)

Le normand (旧情報または特定) est indécis.

(ノルマンディの人は優柔不断な人だ。)

Le corse (旧情報または特定) est fainéant.

(コルシカ島の人は怠け者だ。)

「フランス人は」から始まるのはフランス人という種類について話をしているからである。

テキストの基本的な機能は情報を伝えるということであるが、フランス語の冠詞や「は」/「が」はまさにその機能に欠かせないものである。未知の情報から新出の情報まで、多くの機能が冠詞や「は」/「が」の働きによって定められる。その事実を学習者に理解させるように、細やかな配慮をすることによって学習者の母語に対する意識が高まると同時に外国語に対する意識も高まる



フランス語教育におけるテキスト言語学と相互的学習方法の応用  
ことはいうまでもない。だからフランス語の冠詞と「は」/「が」の使い方に  
共通点があることを学習者に理解させる必要があると思われるので、どういっ  
た練習ができるかを次に見てみよう。

#### Ⅳ

たとえば、日本語の新聞の三面記事とフランス語の三面記事を用意する。そ  
れぞれ記事内容が似たようなものを選ぶか、あるいは日本語の三面記事の仏訳  
を準備し、それぞれの記事をバラバラにしてから、学習者に記事を元の順番に  
戻すように指示する。この練習は基本的に学習者二人または少人数のグループ  
でやるように指示する。なぜグループでやるように指示するかというと、学習  
者がお互いに自分たちがすでに持っている知識を確かめ合うことができ、ま  
た、補い合い、増やし合うこともできるからである。この問題は、一般に難し  
く感じる学習者が多いし、目標の解答に達せられないまま終わることもある。  
そういう場合は、より簡単な問題に移る必要がある。より簡単な問題とは同じ  
三面記事を使って、今度は学習者に日本語の三面記事に出てくる「は」と「が」  
のついた名詞に線を引かせ、それらが対応する言葉をフランス語の三面記事か  
ら書き出すように指示する。さらにそれぞれの特徴を考え、フランス語と日本  
語に共通点があるかないか探るように指示する。その後、新情報・旧情報の説  
明をし、前もって教師が作った旧情報・新情報の表にそれぞれの単語を入れさ  
せる。そのような作業を通じて、学習者に、ある記事の中にある旧情報の「は」  
と新情報の「が」、あるいは旧情報の定冠詞と新情報の不定冠詞に気付かせる  
ことができる。学習者はテキストの中で旧情報と新情報に出会うことによって  
テキストの結束性、複数の文の間で個別の情報がつながって行く様子をはっき  
りと体験することになるだろう。

次に与える練習は先とは異なるもので、今度は学習者にいくつかの単語から  
三面記事を作るように指示する。教師は学習者のレベルによっては、二段階で  
作ることを勧めてもよい。第一段階では、日本語で三面記事を作らせる。旧情  
報の「は」と新情報の「が」に注意しながら旧情報・新情報の表にそれぞれの

単語を入れさせ、学習者が作った三面記事の流れを確認させる。最後にその記事の内容が聞き手に正確に伝わるかを確認させるために皆の前で発表させる。次に第二段階では、日本語で作らせた三面記事をフランス語に訳し、フランス語で第一段階と同じことをさせる。最初からフランス語でできる学習者にはフランス語のみでやるように指示する。

このようにテキストというものについて考える機会を与えると、学習者はテキストに様々な進行があることに気付く。さらに進行を変えることによって旧情報が新情報になったり、新情報が旧情報になったり、新情報の繰り返しがあったりすることによってテキストが作られて行くというプロセスに参加させることになる。

またこのようにすれば、コミュニケーションのプロセスを理解することによって、自分自身の外国語習得のプロセスを理解することができ、より着実に習得が進むことにつながるだろう。

要するに、学習者により自然な外国語を使わせようと思えば、より身近な母語に意識的に触れさせる必要があると思われる。それは外国語と母語の共通点について考える機会になり、リュックが外国語習得と母語習得についてその著書で述べているように、「テキスト言語学の視点からすると、“文”(phrase) というものによってテキストの描写が限定されないのは、コンテキストとテキストの中の文の相互依存関係のせいである。さらに、あるコンテキストの状況によって、単独の文をテキストとして扱うこともできるし、その単独の文に新たな文をくっつけるだけでテキストとして完成させることもできる。このような文と文の関係、その出現の効率のよい規則性について考えたり、詳しく調べたりすることがテキスト言語学の目的である」ということを学習者に理解させることになる。(Rück, 1991:13)

先に紹介した練習だけでなく、リュックが指摘しているように単独の文をテキストとして扱うこともできるし、その単独の文に新たな文をくっつけるだけでテキストとして完成させることもできるという単純な練習問題も有効であると思われる。学習者は自分で文を作って行く段階で文と文の関係について考え

フランス語教育におけるテキスト言語学と相互的学習方法の応用  
たり、母語と比較したりするというプロセスに導かれるようになる。外国語の  
習得にはいくつかの能力が必要とされるが、その一つとして母語の理解は欠か  
せない。母語の理解が不十分であると外国語習得のプロセスの中で障害にぶつ  
かることはいうまでもない。

## 結 論

コミュニケーション能力を向上させるにはテキスト言語学と相互的学習が必要  
である。テキスト言語学という方法にも相互的な学習という方法にも不十分  
なところがあるかと思われるが、フランス語または外国語を教えるに当たって  
はともに不可欠なものだ。どちらかの方法だけで、外国語を教える時の問題に  
関してすべて解決が得られるとは言えないが、この二つの方法によって学習者  
に伝えられるべき様々な知識が確実に伝えられて行く。学習者に伝えられるの  
は外国語に関する知識だけではなく、母語に関する知識だけでもない。それは  
学習者が自分自身の社会に触れることでもある。外国語を身につけるには、総  
合的な手段が必要であり、複数の方法をとるべきである。その中でテキスト言  
語学と相互的学習は非常に有効なものであろう。

### 参考文献

- Adam, J-M. 1990. *Eléments de linguistique textuelle*. Mardaga.  
Adam, J-M. 1999. *Linguistique textuelle*. Nathan Université.  
Cicurel, F. 1991. *Lectures interactives*. Hachette.  
Fuchs, C. 1996. *Les ambiguïtés du français*. Ophrys.  
Kerbrat-Orecchioni, C. 1998. *Les interactions verbales t.1*. Armand Colin.  
Kerbrat-Orecchioni, C. 1991. *L'implicite*. Armand Colin.  
Kerbrat-Orecchioni, C. 1998. *Les interactions verbales t.3*. Armand Colin.  
Halliday M. A. K. & Hasan R. 1976. *Cohesion in English*. Longman.  
Le Bray, J-E. 1998. *Linguistique textuelle*. CNED.  
Meirieu, P. 1987. *Apprendre...oui, mais comment*. ESF.  
Moirand, S. 1990. *Une grammaire des textes et des dialogues*. Hachette.  
Puren, C. 1998. *Se former en didactique des langues*. Ellipses.

Rück, H. 1991. Linguistique textuelle et enseignement du français. Hatier.

Vargas, C. 1999. Grammaire pour enseigner. Armand Colin.

Weinrich, H. 1973. Le temps. Seuil.

井口厚夫・井口裕子（2004）『日本語文法整理読本』バベル・プレス。

日向茂男・日比谷潤子（1994）『談話の構造』荒竹出版

日本語教育指導参考書11（1995）『談話の研究と教育1』国立国語研究所

日本語教育指導参考書15（1989）『談話の研究と教育2』国立国語研究所

モレル, C. (1999) 『フランス語の授業における相互的学習, 外国語教育におけるFD研究』立命館大学教育学科研究所

モレル, C. (2002) 『テキスト言語学—教室での使い道はあるだろうか?』りべるたす第16号